

B-141 型染めについての一考察 — 中国の剪紙および藍印花布との関係 —
安城学園女短 塚本玲子

目的と方法 模様染めに型紙を用いるのは、中国と日本のみである。藍印花布、紅型、型反禅等がその代表であるが、発生等についてまだはっきりしない点が多い。そこで古くから、中国の民間工芸として存在する、剪紙との関連においてこれらを考察してみた。

結果 剪紙は、鋏で紙に模様を表わす、中国の代表的な民間工芸であり、紙の発明と同様からの古い歴史を持つ。その図案のモチーフは、自然の風物や身の廻り品であるが、その組合せは、隠喩と諧音の手法を通して、民衆の福祿寿を願う気持が表現されている。正月等に玄関や窓に貼ったり、贈物の上に添えて気持を代弁させたりする。

藍印花布は近年、日本向けに生産された物が出廻っているが、それはほんの一部である。かつて藍印花布は、前掛、上衣、枕カバー等広い範囲に用いられ、剪紙に表現された人物の衣服からも、その二どがよくうかがえる。またその模様構成も、多くの場合剪紙と同様であった。剪紙は一般には一枚ずつ鋏で切っていくが、何枚か同時に作る場合は、ナイフで彫り、これを刻紙と呼んでいる。模様、用途共に剪紙と全く同じであるが、藍印花布の型紙作製と同じ技法である。そしてこれはまた、紅型の型紙の彫り方とも同じである。

剪紙は、特に農民達の手軽に手に入る飾りとして、古くから使われてきた。そしてその一部は、刺しゅうや染物の型紙にも用いられた。華南地区での木綿の栽培と共に、これに模様を付けることは、ろうや木版でも行なわれたが、剪紙で培かれた技法や感覚を使って、型紙による模様染めも行なわれるようになった。そしてそれは一方で沖絶へ渡って紅型に発展し、一方は京都へ伝わって伊勢型紙を生み出したのではなからうかと考えている。